

樹木には年輪というものがある。樹幹を支え、1年ごとに年輪がふえることによって樹齢がきざまれ大木になってゆく。朽木になってしまわぬ限り、年輪の増加はそれなりにその木の評価を増すものである。会社にも、そのような年輪に比較されるような歴史の歩みがある。1年ごとに、それが発展と成長を象徴するものであれば、その会社は順調にのびてゆくことになる。

今度、医学書院は合併10周年を迎えたので旧蹕その記念の会を持った。医学書院の前身は、金原商店から分れ出て、戦時中の企業合同でできた日本医学雑誌株式会社であり、それに学術書院が合併してできたのが今日の医学書院である。学術書院は、日本医学雑誌株式会社から分離独立してできた組織であったから、いわば親子が一緒になったようなものである。10周年の記念の会は、日本医学雑誌株式会社と学術書院が合併して、医学書院としての新たな歴

史を刻むようになったことを記念したものであった。合併10周年と言ってもよいし、改称10周年と言ってもよいのである。

近代的な出版企業としての歩みは、この年から緒についたと言って

編集デスク 4

年輪というもの

長谷川 泉

もよいだろうから、その意味では10年の年輪は、これで10年になったという年輪であるよりは、まだ10年にしかないという年輪として受けとられてもよいのかもしれない。日本医学雑誌株式会社が創立されたのは昭和19年であるから、その時から

数えても16年である。

年輪のすくなさということは、樹木の場合にはある段階までは決定的な要素となる。しかし人為的に努力して方策を講ずることのできる会社の場合には、樹木の持つ年輪の宿命と限界を打ち破ることが可能である。会社の発展というものが、自然界における年輪の増加と等しいように見えて、実はまったくそれとは違う要素がそこにある。

170人の社員のうちで、熱海の富士屋ホテルにおける記念の会で10年以上勤続ということで表彰されたのは11名にすぎなかった。このことは、わずか数人で始められた日本医学雑誌株式会社が10余年にして170名の医学書院の亭々たる大樹になったということであろうか。樹木は10余年で、年輪増加の機構を変えることはできない。しかし、医学書院は会社の年輪増加のメカニズムを変革する意欲を持つことを念頭においている。

みて、社会的な接触をするのである。自分はいつも全体の中のどのような立場にあるのかという関係を意識しなくては、出しゃばりすぎたり、必要以上にしりごみしたり、たとえば仕事のことで馬車馬のように猪突的なことをして、恥をかいたり、迷惑をかけたりするのである。また絶えず、局所的な存在の自分の仕事は、全体の中というもののなかでどんな関係にあるかを認識している者は、物わかりが早く、要領よく仕事をすすめてゆることができるのである。

「上手な話し手は、役に立つ人間である」との、サレット博士の言葉は過去20年のアメリカを風靡したといわれているが、この「上手な話し方」は、前にも述べたように言葉の技術や魔術で相手をだまし、大衆を南瓜だと思ふ話術、口先だけの口上手とは全然別のものである。事実を公平に話そうとする倫理的な規準をもち、自分の思っていることをはっきりと言葉に表わす能力をもつ、民主主義精神に基づく「総ての人のための話し方」である。明朗な社会を作りだす人びとを養成する

人間の基礎的教養とされる「話し方」である。

「話し方」は一生の勉強であって、私もが経験すればするほど、また知識をませばますほど、そして自分を内容の豊富なものにすればするほど、上達するのである。

「話し方」教育は口先だけの技術を学ぶのではなく、むしろ体全体で話すということを学ぶので、話し手の姿勢、目つき、手の使い方、すべてがその人の話の一部にはいるのである。福沢諭吉が「人の前で話すことは、勝つか負けるかの一騎打ちである」といったが、それほど効果的なコミュニケーションを行なうには真剣にならなければならない。最近の米国における世論調査が明らかにしたのによると、43歳の民主党ケネディ氏が副大統領のニクソン氏に勝ったのは、おもに、彼のスピーチの効果があがったのだということである。スピーチは人を動かす力になる強力な手段の一つである。これがコミュニケーション——両面交通の完成された形である。

(筆者・国立キリスト教大学助教授)